

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18730514
 研究課題名（和文） ドイツ新教育運動における「対話的關係」の構築に関する研究
 ー幼小連携の可能性を中心に
 研究課題名（英文） A Study of Building "Dialogical Relationship" in German New
 Education :Focusing on the Possibility for Cooperation between
 Preschool Education and Elementary Education
 研究代表者
 内藤 由佳子 (NAITO YUKAKO)
 高田短期大学・子ども学科・講師
 研究者番号：80421353

研究成果の概要：

ドイツ新教育運動期におけるベルルト・オットー学校では、従来の子どもと教師の固定化された関係性を変革し、「対話的關係」を構築するために、言語活動を取り入れた活動を中心に認識の萌芽である気づきやつぶやきを重視する実践がなされていた。教師は複数の記録媒体を用いて、継続的に子どもの発達や変容を見守り、省察すると同時に、それらを新たな活動・学びへと生かす反省的で創造的な教師のカリキュラム・デザイン力を身につけていた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	180,000	2,080,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学 4001

キーワード：教育学 ドイツ新教育 幼小連携 カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

(1) 子ども理解と教師の指導性

我が国において幼小連携の重要性が主張されて久しい。「小1プロブレム」に代表される子どもの問題行動や授業の不成立はますます低年齢化している。学級指導の困難さの理由として、教師の指導力不足や就学前教育との連携・協力不足が挙げられている。こうした問題は幼稚園側と小学校側が互いの実践を内容、方法、子ども理解の面において十分に理解し合えていないことに起因し、その根底には幼稚園、小学校間の教師の子ども

理解とそれに基づいた指導・援助のあり方の隔たりが課題として存在している。

教育課程審議会答申(1998年7月)では、小学校生活科における指導計画作成の要点の一つとして、「児童理解の徹底」が提起された。しかし、「児童理解」の具体的な観点についての言及はされておらず、教師が子どもをいかに理解するか、そしてそれに基づいた教師の意図や指導性をどのような手立てとして具現化するかという点について、具体的な保育・授業場面に照らして再検討していく必要がある。

(2) ベルトルト・オットー学校における実践

19世紀末から20世紀初頭のドイツ新教育運動では、制度化された学校教育の中に子ども固有の価値と能動性を見出し、「子どもから(vom Kinde aus)」の教育が提唱された。特に、本研究が対象とするオットー学校(Belthold-Otto-Schule)は、学校内に「協同体」を構想することによって、子どもの主体性・自発性を重視しながらも教師の指導性を後退させることなく、子どもと共につくる学びを展開した。さらに、学校内においては教師間の連携や同僚性が確立されており、教師自身の詳細な記録を通じて具体的な実践を分析することは、わが国の幼小連携を考える上においても示唆に富む。

オットー学校については、これまで日本、ドイツ両国において、具体的な授業実践を直接の対象とした研究はほとんどなされていない。ノール(Nohl, H. 1879-1960)や梅根悟は、学校設立者であるベルトルト・オットー(Otto, Berthold, 1859-1993)の言説を部分的に引用し、「教育方法の放棄である」と批判した。しかし、授業のプロトコル等の一次資料を用いた論証は全く行われておらず、研究代表者はこれまでの研究において、授業実践記録を詳細に分析し、従来のこうした批判は妥当しないとして再評価を行った。

本研究は、授業実践記録から解明したオットー学校のカリキュラム構想の特質を踏まえ、さらに具体的な一次資料である、教師自身の記録を考察することによりこれまでの研究を「子ども理解」の視点から発展させたものと位置づけることができる。

2. 研究の目的

本研究は、ドイツ新教育運動の「子どもから(vom Kinde aus)」の教育を代表するベルトルト・オットー学校の幼児・初等教育段階の接続に関する具体的な授業実践をこれまで日本、ドイツ両国において取り上げられてこなかった一次資料を収集・分析することを通じて明らかにすることを目的とする。特に学びにおいて、固定的な「子ども-教師」の関係性を変革し「対話的關係」の構築を可能にするために、教師がいかに子どもを理解し、援助・指導の視座を見出したのかという観点から考察を進める。

3. 研究の方法

本研究に必要な一次資料は、当時の教師による手書きの資料、学校内部資料等の貴重文書、あるいは当時の新聞、雑誌が中心となり、その大部分はコピーが禁止されているため、

日本からの取り寄せによる入手は不可能である。そのため、現地での資料収集が必須となる。

研究代表者は、資料収集の準備段階として、オットー学校関係の資料を多く所蔵している州立文書館の司書に定期的に研究の進捗状況を連絡し、必要な資料についての情報収集を行った。また、オットー学校発行の機関誌を多く所蔵するハノーファー大学教育学部附属図書館の館長には、留学中より研究課題に対する理解を得ており、訪問時には特別に貴重書をコピーする許可を得た。

以上のように、オットー学校の資料を所蔵する図書館、文書館の所在を確認するだけではなく、効率よく確実に資料収集を遂行するために、司書との連携、協力体制を維持し、未発表・未整理の資料の発掘に努めた。

具体的な資料の内容については、以下の通りである。

(1) 収集する資料の内容

オットー学校に関する資料は、①オットーの著作、②オットー学校発行の機関誌、③当時の新聞雑誌記事、④オットー協会会報及び会議資料の4種類に大別される。このうち、①オットーの著作の全てと②オットー学校発行機関誌の初等教育段階「総合学習」実践に関する部分の記録は既に入手し、分析済みである。本研究では、オットー学校の幼児教育と初等教育・低学年の授業実践記録及び教師による学びの記録とそれに関連する全ての資料を収集の対象とする。

(2) 収集の方法

ドイツ諸都市(ハンブルク、マクデブルク、ベルリン、ハノーファー)の文書館、図書館を訪問し、上述の資料を収集する。文書館の資料は古い手書きの資料が大部分を占めているため、コピーは許可されていない。そのため、資料をコンピュータおよびビデオに入力し入手する。

(3) 資料の整理

上述のように、コンピュータ入力およびビデオ撮影を通じて収集した資料は、紙媒体の資料として精確に復元し、翻訳を付して整理する。

4. 研究成果

一次資料である授業実践記録の分析を通じて得られた結果は、以下の通りである。

(1) 授業実践におけるオットーの「協同体」構想

子どもの側からのカリキュラム構想を実現したオットー学校の鍵となる概念が「協同体」である。オットー学校の学びにおいては、

「子ども—子ども」、「子ども—教師」の相互主体的な「対話的關係」が重視されていた。つまり、子どもの側からのカリキュラム構想は、「子ども＝学ぶ人」、「教師＝教える人」という学びにおける画一的な関係性の変革がその基礎にある。オットー学校では、幼児期と初等教育段階の子どもが共通で行う活動が数多く実施されており、そこでは、遊びを中心としながらも個々の子どもの学びを保障するカリキュラムが構想されていた。オットー学校の初等教育段階において具現化されていた「協同体」構想の視座は以下の3点である。

①ナショナルカリキュラム的な上意下達型のカリキュラムに追従するのではなく、ボトムアップのカリキュラム開発を行うこと

②個々の子どもに応じて、授業レベルにおいて柔軟なカリキュラム・デザインを志向すること

③長期的な視野から子どもを見取り、そこから得た情報を絶えず子どもの学びにフィードバックすること

(2)低学年「基礎的学習」の実際とカリキュラム・デザインの特質

オットーは旧来の学校においては、子どもの本性が考慮されず、教科によって子どもの精神が分断されていると批判し、就学前からの子どもの意識を連続させる必要性を主張した。そしてその克服のために、初等学校低学年の授業を「基礎的学習」とし、遊びを伴った活動として組織した。遊びを中核においた授業を組織する際、オットーは、①子どもの興味・関心・要求を明確にすること、②そこから芽生えた気付きを発達させること、という2つの点が重要になると主張し、それらを実現するために「基礎的学習」には、①「遊び (Spielstunde)」、②「話し合い (Plauderstunde)」、③「物語り (Märchenstunde)」の3つの領域を設定した。

オットー学校の低学年で行われていた「基礎的学習」はわが国の生活科とも共通点が多く、幼小連携を構想する上においても重なり合う面の多い学習であると言える。ここでのカリキュラム・デザインの観点は、以下の5点に集約することができる。

①子どもの主体性、②環境との関わり、③認識の萌芽の尊重、④個に応じた支援、⑤発展的・創造的な学び。

まず、①子どもの主体性について、オットーは子どもが主体的・自律的に学びにかかわるために、テーマの決定は、子どもの側から行い、そこでの表現は完全な自由に支配されていることを重視する。②環境とのかかわり

について、子どもが自分自身とかわりながら、自らを取り巻く環境や人々と直接的にかかわることが必要とされる。③認識の萌芽について、教師は、対話の中で対象と子どもが行った経験を結びつけ、そこから新しい認識を生み出さなければならないとされる。そして、認識の萌芽としての「問い」が重視される。とりわけ低学年においては、問いの前段階としての「つぶやき」が認識にとって重要な役割を果たす。教師は子どもの「つぶやき」の背景にあるものを推し量らなければならない。④個に応じた支援について、オットーは、子どもと教師の協同活動に基づいた協同思考を重視しながらも、それらが全体主義に陥ることなく、双方向のコミュニケーションとなるために、子どもに対して、人はそれぞれ異なった興味や考え方を持っていることに気付かせ、それに対して寛容的な態度を取ること、そして相互に尊重し合うことを授業において相互に教育することを重視する。⑤発展的・創造的な学びについて、教師は、以上のような子どもの思いを受け止めつつ、それが新たな学びとして問題解決につながるような環境設定、教材提示をしながら子どもを支援していくことが求められる。

(3) 子どもと教師の「対話的關係」の基礎となる記録媒体

オットー学校において、子どもと教師の「対話的關係」構築のために重要な役割を果たすものに、子どもによる、①学校ノート (Schultagebuch)、②みんなの日記 (allgemeines Tagesbuch)、そして教師による、③日課ノート (Stundenbuch) という3種類の記録媒体がある。子どもとの対話的關係を築く上で特に重要となるものが、教師による「日課ノート」である。これは日々の活動・学びの中で子どもが何を学び、どのような関心に基づいてどのような行動を取ったかなど、次の授業を進める上で必要な子どもに関する情報を教師が書き留めておく記録を言う。子どもの興味から芽生えた気付きを、対話を通して認識へと高めていくカリキュラムをデザインしていくためには、子ども一人ひとりに対する入念で長期的な観察が不可欠となる。このように教師の観察や評価は、点数ではなく、継続的に子どもの発達や変容を見守る形でなされる。こうして教師が蓄積した子どもの記録は、最終的には子どもの活動や気付きを価値付けるものとして、子どもの学習に返されてゆく。そして、教師の評価とともに活動の連続性を支えるものとして、子どもの記録による自己評価がなされていた。

(4) 幼児教育・初等教育段階の接続

オットー学校における幼児教育・初等教育段階接続期における指導の特質は以下の通りである。

①子どもに対する直接的な指導や問いかけは避け、子どもの日常のしぐさやつぶやき、行動を受け止めることで活動・授業を構想する。その際、周囲の子どもや保護者とも密接にかかわり合い、子どもの本質に迫る工夫がなされていた。

②子どもの実態や生活に即した教材を用いて活動・授業を構想する。しかしそれは、年齢、季節などによって固定されたものではなく、子どもの要求に応じてたえず変更・修正可能なものとして捉えられていた。

③教師だけではなく、子ども同士をかかわらせながら、仲間との活動を可能にする居場所づくりが目指された。そして、そこで子ども自身が必要とする「知識」や「技能」を習得し、活動の中から、しだいに系統性を見出すことが意図されていた。

以上のように、オットー学校の授業実践は、子どもの側にあらゆる学びの契機を見出しはいたが、それは決して子ども本位なものではなく、明確な指導観を有していたことが明らかになった。オットー学校の教師は、当時から自分自身の授業実践を記録し、省察するという課題意識を持ち合わせていた。それは、子どもの活動や学びをただ網羅的、平面的に記録するのではなく、子どもからのカリキュラムを構想・実践していくことを目指した集約的な記録として表れている。ここから導き出されるものは、保育・授業を省察すると同時に、それらを新しい活動・学びへと生かす反省的で創造的な教師のカリキュラム・デザイン力であると言える。こうしたカリキュラム・デザインの構想を保育者、教師が協同で取り組むことは、幼小連携を考える上においても示唆に富むと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①内藤由佳子「学びにおける教師と子どもの対話的関係の構築に関する研究ー子どもと教師のカリキュラム協同構想の視点からー」『高田短期大学研究紀要』第27号 2009年3月1日

②内藤由佳子「対話的関係に基づいた幼小連携一言語活動の充実の観点からー」『高田短期大学研究紀要』第28号 2010年3月1日刊行予定

〔学会発表〕(計1件)

内藤由佳子「幼・保・小連携のためにできること」高田短期大学保育セミナー 2009年7月12日 高田短期大学

〔図書〕(計2件)

①大田光洋・内藤由佳子・大迫秀樹・田口鉄久・白澤早苗・片山順子・斉藤二三子・池田美桜・中山美知子『保育内容言葉』(第2章「領域「言葉」とは何か」)みらい 2008年 9-23頁

②太田悦生(編)・新井美保子・石井章仁・石川昭義・市野繁子・鈴木岩雄・内藤由佳子・浜野兼一・菱田隆昭・前田キミヨ・松本和美・三宅茂夫・百瀬ユカリ・渡辺桜『新保育内容研究』(第5章「保育計画と指導計画」)同文書院 2009年 91-107頁。

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内藤 由佳子 (NAITO YUKAKO)
高田短期大学・子ども学科・講師
研究者番号：80421353

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし